ずいそう

父の背中

父は生前、国策製糖会社の医師としてサイパン島に渡り、その後テニアン島で医院を開業していたことから、私は両島で育った。そこは、戦争による悲惨な玉砕があった島として知られる。開戦前、島はリーフのあるコバルトブルーの海に囲まれ、親日的なチャモロ人が住み、ヤシとバナナ、そしてサトウキビ畑が広がり、南洋桜が咲くのどかな環境であった。当時、父（俳号：ましろ）が読んだ句の代表作に「国旗ふく　貿易風は　日もすがら」〈ホトトギス・季句〉がある。

米軍の戦闘機や艦砲の攻撃が始まると平和な島は一変し、私たちは防空壕や山の中の洞窟に逃げ込んだ。魚雷を受けた多くの日本の船が火を噴いて沈む光景を山の上から見ていた。戦況が悪くなった1944（昭和19）年、民間人は引き揚げることになり、十数隻の貨物船が来て、父を残して母子3人が乗船した。救命胴衣を着たままの1週間の船旅の間、船団の半分は魚雷などの攻撃を受けて沈没した。帰国後、父の実家のある兵庫県の田舎に住んでいたが、両島が玉砕したため父のお墓を建てた。しかし父は捕虜となって運よく生き延び、捕虜収容所の所長をして1946（昭和21）年に帰国した。

戦中、父の洞窟での生活は、水は1日に盃1杯の配給が6日間続いていたが、洞窟から出て降伏しようとすると日本兵が背後から銃で撃つので出られなかった。一方、米軍は各洞窟を火炎放射器で焼き回り、父の洞窟も焼かれたが、飛び出た岩の陰にいて助かったと言っていた。いよいよ水がなくなって数日が経つと、衰弱する人も出てきたので、撃たれてもよいと思い、父はシャツを枝に縛って洞窟から出た。捕虜になったとき、水や牛乳を渡されたが、それを一気に飲んだ衰弱者の何人かはショック死したという。

帰国した父は、実家近くの山村に医院を開業した。専門外を含め、あらゆる病

気の治療に当たった。新聞や雑誌も届かない戦後の山村の暮らしの中で、父は夕食時などに戦争や人生の体験談や世の中の動きなどを私たちによく語ってくれた。

サイパン・テニアン島が1944（昭和19）年に米軍の猛攻撃を受けた後、バンザイクリフや崖の上から多くの女性や子どもが飛び降りて亡くなったが、その光景を詠んだ句「断崖を　木の葉と舞いて　散りにけり」や、戦いの惨状「炎天下　腸ひきずりて　卒は死す」などが残されている。捕虜収容所から父が見ていた光景で、米軍が大きなブルドーザーで飛行場を造り始め、10日ほどで巨大な滑走路を完成させると、すぐに多くのB29爆撃機が飛び立つさまを見て、日本はもう負けると思ったと言っていた。その後、原子爆弾を積んだ爆撃機が広島・長崎へと飛び立っている。そのような話をしながら、父は小・中学生だった私に医師という仕事についても語ってくれた。

植木　實●学校法人大阪医科薬科大学理事長

✧医者の仕事は昼も夜もないぞ。✧医者は金儲けしようと思うな。✧酒は飲んでもよいが、タバコは吸うな。✧名医とは、例えば一見風邪だと思える多くの患者の中から肺炎の人を見つけられるような医師だ。✧医師には上医・中医・下医がある。上医とは自分の目が届く人たちが病気にならないように気を配る医師をいう。

父は82歳で慢性の肺炎に罹り、衰弱していく中で、看病している私に「病気を治すのは難しいじゃろうが、判ったか」と言い、亡くなった。父が自身の病で示した最後の教訓であった。

私は学長職を含めて約40年間、医学教育に携わり、講義や学生の集いで前述の父の言葉を含め、医師は一生が勉強で、それを怠ることによる知識や技術の不足は絶対に許されないことを話してきた。

高い見識を持つ父が山村の一開業医で終わった人生に、私は時折深い感慨を憶え、ふと〝仰げば尊し〟の歌が浮かぶ。